

自殺代行

西村嘉乃

あの日の朝、七時〇一分発大宮行きの電車は、私を迎えに来なかった。

エレベーター前

異様に人が溢れた小さなホーム

ブルーシートに覆われた身体

顔だけ見えた

即座に死ななかった顔

死ねなかった顔

死に損なった顔

その姿を見たときに血液が全身を巡った

ああ

私になりたい姿

私は早くこれになりたいのに

私の家の最寄り駅は、飛び込み自殺がなかなか多い。

彼は死んだのだろうか

彼は無事死ねたのだろうか

名前も生まれも知らない彼に

私は今日も思いを馳せる

ありがとう

私の代わりに死んでくれてありがとう

死にきれない私の代わりに

死に損ないの私の代わりに

ありがとう

本当にありがとう

かつて一世を風靡したバンドのギタリストが死んだとき

一部のファンは追って自殺を図ったらしい

そんなに愛していたのだろう

そんなに愛していたのだろう

死に損ないの私を連れて行ってくれる誰かに

早く出会いたい

早く

早く

早く迎えに来て

お願い

早く早く早く早く！

もう、私は電車を待つとき、エレベーター前には立てない。

あれほど憧れた姿を見たのに、私はまだ、怖いと思っている。

この世界に別れを告げるには、私はまだ弱すぎる。

いつか私が死ぬ時は

勇気を出して飛ぶときは

誰かの代行になりたい

私の内臓を

骨を

血を

ぐちゃぐちゃのドロドロを

目に焼き付けて

臭いを鼻に覚え込ませて

無様な私に胸を高鳴らせて

私が胸を高鳴らせてから

半月後に死んだのは

かつてこの国の総理大臣だった男だった